



社会福祉法人

香川いのちの電話

第57号

通

信

相談電話

みみをかたむけなやみゼロ

087-833-7830 087-861-4343

FAX相談

むつんでいちばんしみじみ

(24時間年中無休)



栗林公園の梅林 写真提供 宮武則明

ハムレット

労働者健康福祉機構 本部研究ディレクター 小山 文彦

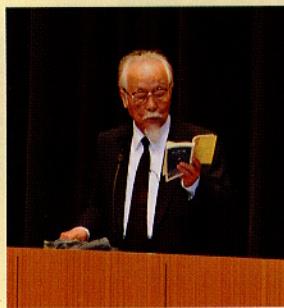
それは、シェイクスピア作の戯曲です。王子ハムレットの台詞、「生きるべきか、死すべきか(それが問題だ)。」は有名だと思います。けれども、原文‘To be or not to be’は、そもそも「存在するべきか、しないのか」といった意味で、生死の選択だけを意味するものではないようです。

自分が自分として「在るか、なくなるか」は、人々の様々な局面でわきあがる想いかもしれません。たとえば、「自分の希望をかなえるべきか、あきらめるべきか」、「生き活きとしていたいが、現実は仕事で精いっぱいだ」等、自分らしく「在る」ことが、現実に負けそうなこともたくさんあるのではないでしょうか。そして、不思議なくらいに、自分らしくあることや自分に素直になることを邪魔してしまうのも自分だったりします。いつも心のブレーキというものは、周りからのストレスだけではないはずです。

ハムレットは活動的な男でした。自分が「活きて」いけないのであれば、「在る」ことをあきらめなければならぬ、そんな決断を迫られたのでした。「在る」は「ながらう」でもあります。孤軍奮闘の事態は、「在る」ことを見失わせることができます。悲劇の戯曲にあらずとも、予期せぬ事態を迎えている多くのハムレットに、ひとりではないこと、そのまま在って、活きてほしいことを伝えるすべは、声や便りに他ならないと思います。

そろそろ年の瀬です。本年もお世話になりました。皆様、自分らしく在るべく、新しい年を迎えましょう。

平成22年度 香川いのちの電話公開講座 《第24回中四国いのちの電話合同研修会基調講演》



生きることの意味 ぼくは12歳

講師 高 史明氏 作家・評論家

(こう しめい/コ・サミヨン)

【開校日】2010年11月6日(土)

【場 所】サンポートホール高松

【講師プロフィール】

高 史明 こう しめい/コ・サミヨン

1932年、山口県生まれ。在日朝鮮人二代。

1971年に初の小説『夜がときの歩みを暗くするとき』を発表。以後作家としての活動を行う。

1975年、『生きることの意味』で日本児童文学者協会賞受賞。同年、息子である岡真史が12歳で自死。

遺稿詩集『ぼくは12歳』を妻の岡百合子と共に編纂。のちに『歎異抄』に帰依し、著作のほか各地で講話活動を行う。

講演録

みなさん こんにちは

香川いのちの電話の方から手紙やお電話を頂戴いたしまして、今日のご縁を皆さんと一緒にしていただくことになりました。

大会の要項に「耳 かたむけよう 心の声に」いう大きな文字がございます。「心の声」その言葉を目にいたしまして、まさに現代とは「心の声」そのものが聞こえなくなっている。命が明らかに見えなくなっている そういう背景もあって、香川いのちの電話の方々がこのようなテーマを掲げられたと思います。「心の声」「命」私たち人間にとって、根本的な生存の大地であると言っても良いのかと思いますが、それが不透明に成っているという。その香川の方々のお言葉をいただいて改めて考えることでございます。「声」という漢字は、石と石がカチンとぶつかりあった時に発生する音を基礎にして漢字のもの声という字が成り立っている。それは人間関係においては、私と他者の関係がまさに声にかかるのであります。その私と他者の関係が不透明になっているということが、ここに問題定義されているのではないかと思います。同時に私と他者の関係が不透明になっているということは、人間と命の関係が不透明になっている、あやふやに成っていると言う事でもあろうかと思います。もし、そうだとすると人間が今を生きている人間の万人がその基礎としている自分という者、人間は自分と言いますし自分と言う力と知恵で他者とかかわり自然と関わって生きておりますけれども、その自分が不透明に成ってきていている。と言う事があるのではないかと思われます。もしそうであるならば、これは実に由しい問題である。私はそう思います。

私達の現代世界では

振り返りますと第2次世界大戦という大変な不幸な出来事をおくっております。そういう時代の只中でその戦争の末期広島で原子爆弾をあびた岡三吉さんという方がその広島の被爆の後、戦後の時代の中で改めて起こった朝鮮戦争それを前にして彼は被爆体験を思い起こしてそして原爆詩集を発行しております。その詩集の中に表されている彼の心を、まず振り返ってみたいと思います。そしてそれに続いて現代を生きている私たちの同時代の一人でもある、我が手で我が命を絶った我が子の言葉も振り返ってまいりながら、現代での本当の命を生きるとは、どう言うことかと考えさせていただこうと思います。岡三吉の詩の序文は大変有名です。読んでみます。 ちちをかえせ／ははをかえせ／とよりをかえせ／こどもをかえせ／わたしをかえせ／わたしにつながる／にんげんをかえせ／にんげんの／にんげんのよのあるかぎり／くずれぬへいわを／へいわをかえせ。 彼はあの炎とかした広島の爆心地からわずか1000メートルほど離れた所で被爆しました。全身にガラス片のあられを受け、そして被爆した体験を生き延びて「にんげんをかえせ」という詩を読みました。その中には彼が見たことがそのまま「にんげんをかえせ」という声にあると思います。

たとえば「友」と言う詩があります。 黒眼鏡をとると瞼がめくれこんで癒着した傷痕のあいだから／にじみ出る涙があった／あの収容所で凝りついた血をしめらせ／顔いっぱいに巻いた白布を一枚宛てほどき最後のガーゼをめぐると／ひとつの臓腑であった両眼が／そのままのかたちで癒えてうすいしづくをしみ出し／失った妻子のことをいう指先が手巾(ハンカチ)をさぐって顫(ふる)えていた／「ここはどこ、どんなところです？」死体置場から運ばれて來た／最初の意識をとり戻したときと同じ言葉を／また口にしながら／太い青竹をとりなおし／ゲートルの脚先でしきいをさぐり／そろそろと出ていった。 彼の被爆は体験を語る言葉でございます。本当にそれから長い長い半世紀の歳月をへながらも岡三吉は「ここはどこ どこなんですか」という廣島の地で発信した言葉、現代人又それから65年の歳月をへながら今 私は私達の前の課題ともなってきているのではないかと思います。今は何だ私達はどこにいるのだ、私達の命の声として現代世界の深い課題となってきたのではないか、そのように考えられてなりません。最近の世情を省みますと、私は神奈川県の方に住んで居りますけれど神奈川県からこちらに参ります時、羽田の飛行場に出なければなりません。途中横浜までは東海道線に乗って移動します。その東海道線が、昨今は時々突然停車して動かなくなる事がございます。ひとさんは山手線や中央線で度々投身なさる方がいらっしゃいます。このごろは広がってきて東海道線にも飛び込まれる方がいらっしゃる。そういうことがあって、遠出をする時には1時間は余裕を持って出ると言ふことがあります。それを現代の数字でいいますれば、年間3万人を超える方が亡くなっていると思われます。そこにはその方々の「人間をかえせ」という呼びが同時に生きているのではないかと、それは又人間が生きていく上でのよりどころとしている、自分と言うものが見えなくなってきた。 実に豊かな社会でありながら自分がそれを享受しているはずの自分が見えなくなっているではないかと私には思われます。

私達の一人子の岡真史

思われますというよりも、それを教えてくれたのが私達の一人子の岡真史でございます。彼は小学校卒業して半年もたたずして、まだ子供子供した顔つきのままで、自ら命を絶つて世を去りました。後に詩の手帳が残されておりました。そこには今も尚続く現代人私達がしっかりと見つめなければならない人間の基礎としての自分、そして自分と命の関わり、自分と他者の関わり、それがすでに壊れていたような気がします。中学生になったばかりの時、自分と言ふ詩を書きました。「自分自身の脳より他人の脳が分かりやすい みんな信じられない、それは自分が信じられないから」と書いてありました。自分が信じられないから誰も信じられない。 そういう事が彼の生きている上での苦しみになっていたと思われます。皆様はどうぞございましょう。自分を

深く信じて生きておられますでしょうか。そうだとして周りに自分に不安を感じた方はいらっしゃらないか。思えば彼が死ぬ寸前に取り上げた本は夏目漱石の「こころ」でした。食卓に広げたまま食事をしている。何を一生懸命に読んでいるのか。死ぬ寸前のことでございます。不安になりました取り上げてみました。夏目漱石の「こころ」でございました。心の主人公は漱石のまさに自画像で有ると言つていいかと思います。近代日本を代表する文学の一人で。自分の中に何を見つめていたか。私は私自身を信用していないです。だから何人も信用できないです。そのようなことが「こころ」の主人公の中に書き込まれてあります。我が家の子はそれを取り上げて読んでいました。正確にいいますと詩を書いた時の方がはやくて、「こころ」の読み始めは、まさに死ぬ寸前のことでした。何かしかし共通する響くものがあつてこの「こころ」を読んでいたように思います。そうであれば、ここで私は自分と言うものをテーマにしてしっかりと自分と他者の関係はどうなっているのか、本当にしっかりと人間的な連帯、共通観念で繋がっているのか、それが見つめられるのが大事ではないかと思います、我が家の子が命を絶ったと、その近くでございます。

中学三年生の方から手紙

手紙を貰いました。「彼の死は時に非常に悲しいものであるけれど彼は決して在り来たりの悩みで死ぬような人間ではないことを物語たつてゐると思います。彼には希望も夢も生きたいという気力もあったのです。その鋭い感性はきっと彼に意味のある死を気づかせたと思うのです。そして彼自身そういう感性を大事にしていましたと思うのです。だから、もしお母様の抱きしめ方が足りなかつた事や朝鮮に関わる根深い問題が彼を苦しめたとしてもそれは彼に鋭い感性と研ぎ澄まされた眞実の日々を与えたに違ひないのです。彼が人間として生きることを苦しんで死んだのなら、あの最後の詩は生まれなかつたのではないかでしょうか。彼は「悲しみの中からで」ご両親が気にかけていられるような人間の苦しみを全部見つめただうえで、さらに生きようとしています。でもそれが単に肉体的に耐えぬくことにとどまらず、もっと生きる、——そして裏返せば死ぬ——ことの本質を捕らえようとしたように思えるのです。「ぼくは じぶんじしんだから」という言葉に、彼の精神の自在な広がりを見られると思うのです。そして彼は死を選んだ。」そのような手紙を下さった。中学3年生の方がいらっしゃいます。この手紙を私は旅行に出て2日ほど後時間をへてから受け取りました。文章を読みながら飛び上がる程、仰天しました。返事を書く余裕もないのではないかとそのような思いから電話を調べまして電話をかけました。すんだ声のお嬢さんの声が返ってきました。手紙に書かれたとおりのことを電話むこうで語られました。そして私たちは対話を始めました。何度も何度も手紙を書きました。そして向こうからも頑固に自分の主張する手紙がきました。そして今30数年という時がたちました。結果だけをもうしますが、その子はストレートで自分の望みの大学を卒業してその間中、大学生に成るまで、ずっとさほどの手紙の言葉を頑固に翻すことはしませんでした。その娘が死ぬことを止めると手紙が来たのは大学の2年生になってからです。そのときの結論が深く私の胸には刻まれています。一言でいいますと「私は今まで死ぬということを生きることと重ねて生きてきた。しかしある日山へ昇って振り返った時一本の道を見た時、気が付いた私はあの一本道を歩いて頂上にきたのだ、頂上にくるには、一足飛びにきたのでな。一步又一步と歩いてようやく頂上にきたんだ。ところがそこに気づくまで小学校のときから私は一足飛びに頂上をめざしていたのだ。そして何時でも死ねる準備をしていたのだ。大きなそれが間違いであるということに気がつきました。」そういう手紙がまいりました。それを読んだ時、私たち夫婦に、ずっと死ぬといつ続けてきた者から手紙をもらって嬉しさ

のあまり吹き出していました。さらに吹き出しましたのは、翌年は恋人と結婚する気なった。そして現在は一人の可愛い男の子の母親でございます。そしてこの子が生まれたと言う知らせの中に、「この子が死んだら私はもう二度と生きていくことはできません。」と書き添えてありました。それを読みました私たち夫婦は不謹慎に笑ってしまいました。あれだけ毎日毎日死ぬことを訴えてきたあの娘が「この子が死んだら私は生きていられません」と書いてきた。そこ方のお母さんはその子が死んだらどんな思いをするかは、その子の頭の中にはなかつたのです。そのことを思い出しながら思わず笑ってしまいました。そして本当に良かったと思いました。それを考えますと、どんな優秀で意思が堅固であつても人間とは皆自分という闇にとらわれる。自分という人間のささえに成っている根拠は明かりであると同時に闇をその裏側にひそんでいる。自分とは何かと言うことを現代人はもっとしっかりと見つめなければならないのではないか。私たちは今考えております。冒頭に我が子の詩を読みました。「自分で自分が信じられません」そして漱石の「こころ」が自分で自分が信じられませんと言うことがテーマでした。そして心の主人公を漱石はまた自殺させていました。では自分とは何か、それが現代で本当にあきらかになっているのか、そこへ目を移してみたいと思います。

お釈迦様の言葉

自分とはいつて何であるのか、我が子が亡くなつて私はお釈迦様の言葉を時々ひらくようになりました。その中でお釈迦様は人間の根源的な問題である自分と言う者についての眼差しを開いております。愚かな者は自分には子がある。財力があると思って悩む。しかし自分とはすでに自己のものではない。どうして財や子が自分のものであるのか。人間とは自分と言い始めたときに本当の意味を見失ってしまうのではないか。そのことをお釈迦様の教えを告げているように思います。少し複雑です。最初その言葉を見つけてた時、私は我が子が亡くなつて悲しみの中でその癒しをもとめてお釈迦様の本をひらきました。しかし子や財は自分のものではないから始めから自分のものではないとおっしゃる。では自分とは何なのかが問いかけて考え続けました。そして今はお釈迦様の教えの方が正しいと私は思います。そして又そこに現代人が生きる非常に大きな深い闇が横たわっていると思います。翻って現代世界の始まりを振り返ってみたいと思います。私たちいまここに一緒にこの場所に縁をもつて地球が動いていることを感じることも出来ません。思うことは出来たとしても、それを知識として知ってるわけで、地球が動いてるとは誰も思いません。もしも動き出したら大地震が起きた時でしょう。しかし現代人は安心してこの地球の上の生活を営んでいます。そのことが現代人に安心のできる根拠として与えられたのは、ガリレオ、ニュートンたちが地動説を数学的に証明して見せて以降の人間の歴史だと思います。少し込み入ったことでございますけれども地球の人間は昔から天体をよく観測しております。中には物好きがいて星々の動きと自分の位置の間に線を引いて調べる人がいたみたいです。そして克明に調べていて動いているのはどうしても地球の方に思えた。そこで彼は太陽が地球のまわりを周っているのではなくて地球の方が周るっているのだと言う説をだしました。ローマ法王からお叱りを受けた上でござります。お前はそれを数学的に証明することができますか。彼はできませんでした。彼は幾何学で観測していたのです。しかし時代は過ぎて数学も進歩してきました。幾何学にかわって数学の方法で太陽の方が地球を周るっているのではなくて地球の方が周っていることを証明することができました。幾何学の方法で使われる線とは点におきなおすことができる。そしてそのようなことが出来るという意識は数学の進歩からさらに人間の理性を促してあきらかにされること

になります。その上で現代人は生きております。そうすると現代人はその数学的合理的理性を磨くという一点に自分を生きるということの大きな賭けをかけていると思います。自分を大事にするということは数学的合理的理性を磨いていくことにはかならない。私はそれに決して反対ではありません。

第2次世界大戦では

数学的合理的な理性を見失って独善的な知性に毒された時に第2次世界大戦では、どれだけの方が命を亡くしていかなければならなかつたか。自分で自分を死んでいくという日本の軍隊の特攻隊の精神ではそういう極限にまで進みました時にどれだけの青年が自ら命を戦場に散らしていかなければならなかつた。そのおかげでアジア全域太平洋全域で、どれだけ多数の日本人以外の人も亡くなつていかなければならなかつた。日本人の戦死者は300万と推定されておりまます。しかしながら第2次世界大戦で中国人の正確な数ではないが3000万人以上は死んでいるのではないかと、言われております。莫大な数が犠牲になります。そのことを考えますときに数学的合理性といふものは非常に大事です。どんなに大事にしても大事にしきれると言ふことはない。しかししながら、そのような合理性を身に着けることによって現代世界の科学思想というものは人間が生きている自然を逆に深く見失つてきつつあるのではないか。私にはそう思われてなりません。話を少し飛躍させてみると、これは東京の方の小学校の先生に現実に聞いた話です。夏プールに入れて水に慣れさせために水の中を歩いてもらつた。そしたらどんな現象がおきたか足の皮のむける子が続出したと言ふことでございます。そのころコンクリートが悪かったのだと思います。だいぶ前の話です。足の皮のむける子が続出したので、先生はどうしたかと言うと靴下をはかせて歩かせた。文明とはいひに足の裏を弱くしてしまうかと、いうことが象徴的な出来事として起こつてゐたように思います。今はプールを歩いて足の皮がむける子はそれほどいるようには思いませんが、しかし今度は逆に現代の子供、大都会の子供達は裸足で土の上を走り回つた経験が非常に少ない子供が多くなつてゐるのではないか。人間は自然を対象化して土地を利用します。しかしながら人間も大地の上を歩いて生きているのでございます。その大地の上を歩くにあたつて靴の心配は色々いたしますけれど足の裏が土の感触を知らない。そういう形で自分が形成されていく時に人間の五感は理性が発達するほどには発達していくのではないかではないか。そういうことを例えれば、じょうじょう的な別の次元で言うと東京などでお坊さまから伺うのですが葬儀があつて親が亡くなつたと言うことで集まる。そういう中で東京の子供には泣かない子供がこの頃でできている。葬儀の時、親が亡くなつたというのに涙を見せない子供が多くなってきたと言うことを聞きます。それは、取りも直さず人間の五感というものが非常に衰えてきているのではないかと思われます。そういう風に衰えさせてきているものの根っこに人間の足の裏が、土を知らない、手のひらが土の感触を知らない。こういうことが多いのではないかと思います。私が子供のころは大変貧乏で本当に何も無い汚いバラック小屋で育ちました。その代わり回りには自然がたくさんありました。バッタも飛んでおればトンボも飛んでおります。土の上を走つて5,6分も走ると海があります。だから海にはいつでも飛び込んで泳ぐことが出来ます。最近の日本の大手の新聞が書いています。この頃の子供はバッタやトンボを取つたことがない。実際にトンボが飛ぶ姿も、このへんではどうか分かりませんが東京ではめつたにないという出来事に成っております。そうありますれば、あるとき突然赤トンボ群れを見ると皆がびっくりします。トンボがどこからきたか、そのことの驚きの裏側には子供が自然から生まれてきた人間の子供であつても、自然から生まれてきたことでは変わりない、お母さん

のお腹から生まれてきたということではかわりはありません。その人間の子供がお母さんを知らないという感覚になつてゐるのではないか、さらにいいますれば私は昨今の現象で思うことがございます。人間の歴史の中で昔は人間を問う時、人間は親殺しをするということが大きな問題でございます。仏教の浄土経の教えもインドの方で起るその時にはすでに親殺しが課題でございます。そのような人間の本質で本当をどう乗り越えて本当の人間らしさを發揮していくか言うことでございます。しかし今は親殺しもございますけれども子殺しが流行つてゐるのではないかと私は思います。五感が鈍るという中では親が亡くなつてもそのまま押入れに放置したまま一緒に暮らしているということが新聞などで度々報道されております。親が子供を殺していくという事態これほど人間が自分という位置から自分と言う知恵で、どれだけ深く命を見失つてゐるか言うことが感じられます。母親が子を本当に見えなということは日本が朝鮮半島の韓国や朝鮮や中国、がよく見えないという事にも通じてゐるか知れません。その時本当に見えなくなつたら日本はどうなるか。私はそう思います。私は日本で生まれて日本で教育を受けました。子供のころの教育の合言葉がございます。「欲しがりません。勝つまでは」こういう言葉があります。このごろは「何でも欲しいものはあげるよ」と言うのがスローガンでございます。何でも揃つています。その事と通底しますけれど鬼畜米英という言葉がございます。今の若い方はご存知ないかも知れませんが私達の世代はそれでしっかりと教育されました。これは本当の私自身の体験でございます。戦争に負けて米軍が進駐してきました後ろを付いて歩いてお尻をそつと観察したものでございます。尻尾が生えていないかどうか、本当に鬼畜米英と言う言葉が頭の中に沁みこんでいた訳でございます。そして子供達同士でいいました「しっぽがないよ、大きくてかわいい尻をしてただけ」そういうことをと話をしあつた覚えがあります。しかしながら鬼畜米英を信じて突っ込んで行った世代は私達のつい2,3年上でございます。そうであれば私達が本当の意味の豊かさ本当のうえの理性を問う言う事が、どんなに大事かそれを思います。

いのちの電話

そして「いのちの電話」と言うことで今皆さんの活躍なさっておられる「いのち」に関わる眼差しを明らかにしていくと言うことが現代では誰か弱い人を、ただ助けやると言うことではなくて、強い人も全部含めて「いのち」とは一体なんであるか、これを世界中で見つめ直そうと言うふうな眼差しに広げていかなければならない。そういう時代になつてゐるのではないか、そう思います。そういう意味で峰三吉の先ほどの詩を読みます。彼はまさに、その戦争の中で「いのち」が見えなくなつていった、それを彼は見たわけです。==朝== ゆめみる／閃光の擦痕(さつこん)に汗をためてツルハシの手をやすめる労働者はゆめみる／皮膚のずりおちた腋臭をふと揮發させてミシンの上にうつぶせる妻はゆめみる／蟹の脚ようにひきつりを両腕にかぶして切符を切る娘もゆめみる／ガラスの破片を頸に埋めたままの燐寸(マッチ)売りの子もゆめみる。==

本当にガラスの破片はこれは目に見た人にとっては忘れない恐ろしい傷痕だと思います。広島のお寺に呼ばれて、なんで呼ばれたかと思いましたけれども、まず見せられたのはお寺の本堂の柱はおおきゅうございますけれど、ビッシリとガラスの破片が埋まつてゐる。このような状態で私の兄は二ヶ月ほど苦しんだ後死にました。その弟の住職は言っておられました。私は命を見つめるとすることは現代の中で、そういう戦中体験を含めて根こそぎに日本からもう一度、日本自身を掘り起しながら世界に向けて発信して良いと思われます。命とは何であるのか、普通命と言う漢字、私たちは書きます時は命令の命

という字で命(いのち)と字を書きます。命令の命も命(いのち)には違ひありません。しかしながら命令の命の意味する所は出来上がった秩序社会の中で上の者が下の者に命令をする。命令を聞かなかつたら命(いのち)はないよ。いう意味の命を含んだ命令の命が示す命(いのち)。しかし「いのち」という言葉だけの時には普通使いませんけれども生命の生と言う漢字を使います。生命の生と言う漢字には命令の命とは又違う意味あいがあります。生命の生が表す意味は何か。一粒の種は地面に落ちて出てくる時必ず双葉に成って出てまいります。双葉が四葉になってさらに開いてそして生物は伸びていくわけでございます。その生命的の働きを表すのが生きるという漢字になっていける生の字でございます。しかしながら私達は生命のややこしい事を言う時には使いますけれど普通は命令の命そして生命の方の生の字で「いのち」を考えることは殆どありません。それは何を意味しているか。先ほども申しましたが子供達が土を知らない。足の裏が土を知らない。「いのち」が土から伸びていくさまを知らなくなっている。全部出来合のものばかりを食べていくようになっている。そのことも便利でようございますけれど、しかしあう一度ここでしっかりと確かめて本当の生「いのち」とは何かと言うことを世界中の問題として考えて良いと思います。そういう意味で人間の文化を形成していく上で数学的な理性を基礎として成り立たせて数と言うことは何かと私達は深く考えていいように思います。私達はニニンガ4と言えて4という回答があつておれば数とは何かとあまり問いません。しかしながら実はそれも問われていかなければならないのではないか。人間が生きることの意味を本当に考える時に現代人は数を無条件で考えているだけでは戦前のあの莫大な犠牲者の方々の声のない声に応えることは出来ないのではないか。私は思います。数とは何であるのか。私は子どもに死なれて淨土真宗の親鸞聖人の教えを勉強するようになりました。

浄土真宗の親鸞聖人

この先生の教えに数ということを実に正確に捉えている言葉がござります。それが故に750年たっても未だに親鸞聖人のおっしゃることを受け入れておられるかたもいらっしゃるのでございましょう。数とはなんであるのか。このお経の難しい言葉を読むのを止めまして現代語に置きなおします。ある人が私にお空の月を指さして教えてくれた。私が教えてくれた指を見ていた、そうすると教えた人はいう。「あなたは月を教えられているのに月をさしている指を見ていて何故月を見ないのですか。」分かりやすい比喩です。指を見てたんじゃ何時までたっても月は見えてこないでしょう。ところでその指とは人間の言葉の知恵です。人間とは、月を教えられながら教える指を見ていて月を見ている積もりに成っている。個々の人間の持っている根源的な闇と私は思いますが、闇を深く考えなければ人類という者はドンドン暗くなるばかりである。文明が発達すればするほど文明全体が深い闇を抱えるようになる。そのようにおっしゃっておられます。仏教の言葉で言えば「五濁末法」五濁と言う言葉。五つの濁りが深まる。何が五つの濁りか最初は時代が濁ってくる。2番目が思想が濁ってくる。3番目人間の欲望が濁ってくる。4番目人間の資質が濁ってくる。5番目は命濁(みょうじょく)と言う言葉を使います。命が見えなくなってしまう。これが人間の月を教えられて指を見ているときの闇のいきつくところが最後は命が見えなくなる。そのことを端的に表しているのが母親による子殺しという出来事の起きている由縁ではないでしょうか。私はそう思われます。何でも揃っております。欲しい物は、ほぼ全部手に入れられます。しかしながら本当の愛情や本当の悲しみを現代人は忘れているのではないだろうか。涙を流さないまま大事な人を見送っているということの姿の中には子供を本当に愛しむ心が失われていると思います。仏教では仏の知恵を慈悲と言います。愛しむと悲しみ、悲しみ



のないところには本当の愛しみも無い。悲しみがあつて初めて愛しみも普遍的に全人類に広がる愛しみとなっていくのだろう。このような眼差しは現代にいたっても私は根源的であると思われてなりません。繰り返すが、それを私は見失っておりました。我が子が漱石の「こころ」を読んでいたときに「こころは名作なんだ。もっと味わって読みなさい」と私はそう言いました。言ってる事に間違はないといふでも思います。一番困るのは間違いのないことが間違いになるという、人間の月を教えられて指を見ている指の上の知恵です。指で図面を書くことはできます。正しく書くことはできます。しかしながらそれが指で書いているという自覚をもたらさなく成ってしまう。ややこしい比喩でございますがニニンガ4は正しい。正しいが故にニニンガ4という記号はいったい何であるのか。これが現代人が考えなければならない問題ではないでしょうか。

我が子の言葉

我が子の言葉で言いますと最後の方に書いていた言葉。それは「ぼくはしない」でございます。これが一番最後の言葉でございます。殴り書きのようにして書いてありました。= =ぼくは/しぬかもしれない/でもぼくはしない/いやしないんだ/ぼくはだけは/ぜつたいにしない/なぜならば/ぼくは/じぶんじしんだから= =先ほどから度々ふれている自分でございます。全部ひらがなでございます。その最後の「じぶんじしんだから」の所の一宇一字右側に黒い点が打ってあります。その点を見つめると「自分自身だから死にたくない」という叫びがこもっているような気が今もしてなりません。しかしその叫びが自ら死んで行くという衝動を生んでいたのではないか、自分の中には自分に反する自分と言える知恵とは向きの違う動きを人間にさせるような闇がひそんでいる。その端的な表れが月を教えられているのに指を見ている。そこに人間の構造の不可解を人間の理性の不可解さが生まれるのだと思います。これは人事ではございません。

福沢先生の考え方

現代世界でいいましたから、おそらく現代人が福沢先生の考え方を大事にしているからだと思います。半分は当たっている。たとえば福沢先生は「学問のすすめ」を書かれました。人間世界そこには不平等がある。しかし神様は初めから人間を不平等に作ったわけではない。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」でございます。にも関わらず不平等はあります。福沢先生が考えて出した結論は「勉強をしたか、しなかったか」それによって不平等が生まれる。だからおおいに勉強をしなさい。だから学問のすすめでございます。非常に分かり易い。しかしながらおおいに勉強をする。それは間違いで

はございません。しかしながら現代人であって考えていい時に勉強するには言葉がいります。数学をするには数字という記号がいります。そのことについて福沢先生はどう見ていたか。大工さんが家を建てる時ノコギリやカンナがいるでしょう。ノコギリやカンナがなくては家は建ちません。人間の言葉とは大工さんが使うノコギリやカンナに等しい。理路当然でございます。じつに正確無比でございます。しかし現代人が当面しているのはカンナを使う人間はカンナを使うことだけを考えてカンナに使われる事はないか。これが現代人の課題。ノコギリを使う人間はノコギリに使われてしまうということはないか。機械を使う人間は機械に使われて段々人間性を消耗させているという事はないか。福沢先生はそれを問わなかつたのだと思います。だから学問をして学問を正確に積み上げていけば、すばらしい世界が生まれると思います。ある意味で半面正しい。ある意味でその正しさから朝鮮や中国を見るときどういう言葉が生まれるか。彼らは自らの不合理なものの考え方方に気づいていない。そのような眼差しからついに出てくる言葉はそのシナ朝鮮は西洋の風に従って処分すべきのみ。これが福沢先生の言葉として残されております。の中には半分当たつております。しかしながら処分すべきのみ。西洋の風に従って処分すべきのみと言った時にその西洋の風に巻き込まれて欧米と戦争になっていくことを止めることができなかつた。ということをしっかりと見つめなければならぬといふことがあります。これが現代でも課題だ。その同じ時代の人で夏目漱石の時代の人で石川啄木という人がおりまして明治の時代を勉強していく石川啄木に本当教えられる事が多くありました。

石川啄木という人

啄木はあの時代にあって決して幸せな生涯を送ったとはいえない。しかしながら彼は「一握の砂」という歌集の冒頭に東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたわむる有名な歌です。この東海とは何處の海だろうかと色々と論議されたものです。日本では論議ですが韓国では東海というと日本海を意味しています。啄木のこの歌の中には明治日本の発展が実は女性差別を促し、そしていわゆる朝鮮や中国がみえなくなり、日本がだんだんと孤立していく時代があると彼は見抜いていたのではないかそう思われます。彼の評論を読みます。たとえばこう言う言葉があります。我々日本の青年はいまだかつてかの強権に対して何らの確執をも醸(かも)したことがない。今日我々のうち誰でもまず心を鎮(しづ)めて、かの強権と我々自身との関係を考えてみるならば、かならずそこに予想外に大きい疎隔の横たわっていることを発見して驚くに違ひない。じつにかの日本のすべての女子が、明治新社会の形成をまったく男子の手に委(ゆだ)ねた結果として、過去四十年の間いつに男子の奴隸として規定、された。それに抗議すらしなかつた。男子も又女子を踏みつけていて、それを自覚していなかつた。これは婦人参政権一つをとつても明らかに婦人に選挙をする資格が生まれ

たのは、米国日本が敗戦になって初めて婦人参政権が出たのであります。彼はそれをすでに見抜いていた。しかも非常に孤立した状態で見抜いていたわけでして= 呼吸(いき)すれば／胸の中(うち)にて鳴る音あり／風(こがらし)よりもさびしきその音／人がみな同じ方角に向いて行く／それを横より見てゐる心／人が皆同じ方角に向いていく／それを横より見ている心= 大といふ字を百あまり／砂に書き／死ぬことをやめて帰り来れり= 我に似し友の二人よ／一人は死に／一人は牢を出でて今病む= このような歌を詠んでいます。そしてしかもそのように見つめることが出来た彼は故郷の山をどう詠むか= ふるさとの山に向ひて／言ふことなし／ふるさとの山はありがたきかな= 意思を持って追われるようにして出ていった故郷と。その故郷の山に合掌できる心が彼にはありました。現代日本の中で自らの故郷に手を合わせることの人間は物凄い勢いで減っているのではないかでしょうか。農業問題とか経済問題とかいろんなことが論争されておりますけども、私は故郷の山を合掌して拝む。そんなことを言うと「お前は迷信を振りまくのか」と叱られそうでございますけれども、そうでないと、裸足の子どもの足の裏を大地が知らないということは故郷の山に合掌することを心失う。その事は故郷という大地を失うことには到底する。その上で成立した自分であれば他者は見えなくなります。その孤独が日本に広まっているのではないか。私はそう思われてなりません。我が子は自分で死んでしまいましたけれども我が子が残していた願いと言うのは本当に朝鮮人と日本人の間で生まれた自分、自分の命を本当に大事にしようと思えば両方を本当に大事にしなければならない。彼は願っていたと思われます。まあ難しい問題がアジアにはひしめいております。世界も仮想現実と実態の仮想経済と実態経済の矛盾に大搖れに揺れております。そういう難しい時代であればこそ、もう一度原点に戻って命とは何か、万人が共通に命と言う点では結ばれている。これは本当に大事な原点だと思われます。

親鸞聖人のお言葉

親鸞聖人のお言葉で言えば「一切の有情(うじょう)はみなもつて世々生々(せせしょうじょう)の父母(ぶも)・兄弟なり」という言葉があります。一切の生きとし生きるものは生まれ変わりいき変わりその生き方は違えども命としてはみな父母兄弟に等しい。人間はそれを見失っている。といふことがこの親鸞の原点ございます。しかもそれに自分自身がまず見失っている言ふことを定義しております。日本が生んだ世界大の私は思想だと思います。日本列島にはそううう思想が生まれる歴史がございまして鎌倉期は日本の歴史を荷って立つほどの世界大の思想を生み出していた訳でございまして、そのような日本の歴史を本当の意味で大事にしていくことがアジアの平和や世界の未来に大きく関わってくると思います。「いのちの電話」ということで「いのち」のテーマにして思う事を粗雑でございましたけれど、少し考えさせていただきました。今日はご縁を有難うございました。

【平成 22 年度香川いのちの電話相談受信状況】 平成 22 年 6 月～平成 22 年 11 月

開局からの電話相談受信状況 1984年10月6日～2010年11月30日

開局からの受信総件数……427,198 件 1984年10月6日～2010年11月30日
(26年1ヶ月)
開局からの相談総件数……255,066 件

半年間の電話相談受信状況 2010年6月1日～2010年11月30日 (上半期)

相談件数……6,044 件 (男 3,317 件 女 2,727 件)
自殺志向件数……595 件 (男 263 件 女 332 件)
フリーダイヤル相談件数……392 件 (男 218 件 女 174 件)
フリーダイヤル自殺志向件数……141 件 (男 73 件 女 68 件)
着信(話中)件数……63,918 件

分科会 2010年11月6日(土)

- | | |
|--------------------------------|-------------------|
| 【第1分科会】三木 善彦 大阪大学名誉教授 帝塚山大学教授 | 「内観法による自己理解と他者理解」 |
| 【第2分科会】森田 琢美 京都YMC A相談室 | 「効果・効率的な電話相談を考える」 |
| 【第3分科会】阪田憲二郎 神戸学院大学准教授 | 「精神科領域の電話を聞く」 |
| 【第4分科会】大西 節子 島根いのちの電話 | 相談員の研修=絵手紙を活用して= |
| 【第5分科会】小島 克己 香川いのちの電話協会 理事長 | 「これからいのちの電話を考える」 |
| 【第6分科会】松岡 定幸 香川いのちの電話 スーパーバイザー | 「電話相談とストレスマネジメント」 |
| 【第7分科会】島津 昌代 香川いのちの電話 研修委員長 | 「相談活動とセルフケア」 |



相談員の研修=絵手紙を活用して=



「効果・効率的な電話相談を考える」



「精神科領域の電話を聞く」



「相談活動とセルフケア」



「内観法による自己理解と他者理解」

全体会 2010年11月7日(日)

三木善彦 「問題行動や症状の根底にある寂しさをめぐって」



「問題行動や症状の根底にある寂しさをめぐって」



島根県のみなさん

～ご芳志に心から感謝します～

2010年6月～2010年11月

後援会費(812,800円)

寄付金(272,030円)

小川陶芸教室
カトリックスペイン外国宣教会
日生開発(株)耕心会

医療法人財団大樹会 坂出回生病院
三和電業(株)グループ社員共済会

池添紀美代 小畠 年子 島津 昌代 津山 ミチ子 濱野 瞭子 三木 善彦 山本 侃
稻毛 清和 梶 由美 清水 和美 天本 正子 福家 寿代 三沢 直子 芳野 紀子
井上 泰好 桂 美鈴 清水 昭 富岡 幸生 藤川美佐子 宮武 則明 吉村 崇彦
今瀧 則男 河崎 敦子 常慶 守助 長尾 綾野 藤野 典保 三好美也子 村上 清宣
岩崎すゑこ 神原 俊庸 白川 早苗 南雲 正義 二川 幹生 室崎 若子
岩崎 廣明 繪見 圭子 新土百百子 奈良 正史 船城 勝 森上 信子
上野 博 熊田 寿子 鈴木 洋子 西野 信子 舟城三知代 森崎 隆敏
大須賀 誠 高 史明 高橋 道也 西浜 玄次 細谷 正高 森田 琢美
岡市 育子 河野 範子 田島 義子 新田真知子 本田真知子 松尾ミキ子
小笠原 望 坂井 厚子 玉川 蓮恵 畠山 恭子 保井 正明 保井坂春子
岡本久美子 坂井田治子 千葉 正子 濱 好美 松田美枝子 矢野坂春子

小笠原 望 河崎 敦子
河崎 圭子 高 史明
繩見 圭子 島津 昌代
高 岛津 正子 千葉 正子
津山 ミチ子 富岡 幸生
南雲 正義 三木 善彦
三木 室崎 若子 森田 琢美
室崎 若子 矢野坂春子
森田 琢美 吉村 崇彦

※敬称を省略しています

支援者を訪ねて

10

日本基督教団 高松協会
川染三郎 牧師



一ご支援いただきまして、ありがとうございます。いのちの電話とのかかわりは…。

東京の飯田橋の教会におきましたとき、妻がいのちの電話の相談員をしておりました。また、いのちの電話の行事が私たちの教会を会場にして行われていましたし、私もいのちの電話関係者とカウンセリング研究会に参加していましたので、いろいろな方との出会いを通して、多くのことを学びました。

一もうすぐ、クリスマスですが、行事で教会へお集まりになられる人たちとのかかわり、それとは別に信者さんのご相談もお受けになられるのでしょうか。

はい、相談はなくとも、いろいろ配慮はしています。それとは別に、助けを求めてこられる方もあります。以前、家族や友人との関係を失い、一人取り残された孤独感はどうしようもなく、死に場所を求めてさまよった挙句、死に切れず、教会の前に来ていた。そして夜半過ぎに訪ねて来ました。はじめは黙って泣くだけで、2～3時間一言も話しませんでした。その日は泊っていただきました。翌朝、書置きを残して、黙つて帰られました。後日、来られて、そのときの事情を話してくれました。

一話さない方へのかかわりは、大変なことです。つい、聴こうとしがちですけれど、良く此處へ来られて、その方はよかったです。

今、人ととのかかわりが希薄になり、人の縁が切れています。私たち日本人は一般的に自己主張することなく、顔と顔とを合わせて自分の思いを伝えることができないようです。それだけに気持ちを引き出すのは難しいのです。時間をかけてお互いの思いを紡いでいくことで、人間関係を豊かにていきたいものです。

大切なことは、幼稚園や小学生の幼いときに愛情を持って育て、他者と顔と心を向き合って生きることができますように育てることではないかと思います。信仰とは、神と向き合って自分を見つめることです。自分のかけがえのなさを知り、他者と共に生きる愛の力を持つのです。自分の中に他者を受け入れる場所を作るために、自分を捨てる修練をするのです。どれだけの人を愛せるか、他者の重荷を負うことができるかが問われています。人にはいろいろな状況がありますから、それぞれのかかわり方があります。それぞれの対応が求められているのです。強く生きているようでも、内に闇を持っている方がいます。そういう人が出しているシグナルを感じ取ることが大切なのです。

一それはいのちの電話でも大切な事ですが、電話相談は対面でないだけに大変な思いがあります。

社会にはいろんな役割があります。一人ひとりがちょっとだけ他者を受け入れるスペースをつくること、ちょっとだけ他者の話を聴く耳を持つことによって、愛のメッセージを発信し続けることです。

一お話を伺って、教会へ神の救いを求めてこられる方へのかかわりと、いのちの電話にかけてこられる方々とのかかわりは、謙虚に寄り添って聴くという心は同じだと思いました。お忙しい中、ありがとうございました。

(広報担当:寺岡・吉岡)

【発行所】 社会福祉法人 香川いのちの電話協会

〒760-8691 高松市中央郵便局 私書箱152号

事務局 電話 (087) 861-7065

発行人 小島克己 編集 広報委員会